

琉球大学学術リポジトリ

子どもの愛着行動に対する養育者の情動認知の違い：
Mind-Mindedness・情動喚起と育児効力感との関連
から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2016-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新田, あや, 金城, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35569

子どもの愛着行動に対する養育者の情動認知の違い

— Mind - Mindedness・情動喚起と育児効力感との関連から —

新田あや*, 金城志麻**

The difference in emotional recognition for rearer on
children's attachment behavior
— From the relation between Mind-Mindedness, emotional
evocation and childcare efficacy —

Aya Nitta*, Shima Kinjo**

背景・目的

愛着とは、Bowlby (1969/1982) によると、「子どもが不安や不快を感じた際に、養育者など特定の対象への近接を介して安心感の回復・維持することを指し、こうした経験に基づいて養育者との間に築く情緒的絆」であると定義されている。また、愛着行動は「特定の他者との近接を求め、これを維持しようとする具体的な行動」(中尾, 2012) と定義され、Bowlby (1969/1982) によって、定位行動、信号行動、接近行動の3つの型に分類されている。愛着の発達プロセスは4段階に分けられており (Bowlby, 1976)、第1段階は、生後2、3ヶ月頃で、人物の識別は困難であるが、近くにいる人物に対して追視したり、手を伸ばしたりといった定位や、泣く、喃語を発するといった発信をするなどの行動を向ける段階、第2段階は、生後2、3ヶ月頃から6ヶ月頃で、人物の識別が可能になることから、1人あるいは特定の人物に対して定位や発信をするが、まだ完全に人物を識別出来るわけではないため、対象が誰であっても、愛着行動を向ける段階である。第3段階は、生後6ヶ月頃から2、3歳頃で、より明確に人物を識別出来るようになることから、見知った対象に対しては、愛着行動を向けるが、そうで

はない対象には警戒心を抱いたり、関わりを回避するなど、対象によって異なる行動を向ける様子が見られる。しかし、未だ養育者の意図を理解するまでには到らず、養育者の行動を変化させるための行動の見通しは持たない段階である。第4段階では、3歳前後から、養育者の行動や影響を与えるものを観察し、養育者の感情や動機などをある程度推察することが出来るようになる。また、短時間なら愛着対象が不在でも社会情緒的に安心して振る舞うことが可能になる段階である。養育者との関係が構築され始めると、養育者などの愛着対象は自分を保護してくれる存在であるというイメージが子どもの中に確立され、それにより、愛着行動は徐々にその頻度と強度を減少させていくとされる。

従来、Ainsworth et. al. (1974) などによる子どもの愛着安定性の型と、他者の感情理解や誤信念理解との関連など、子どもの資質がその後の発達に及ぼす影響についての研究が行われてきた。しかし近年、母子相互作用の1要因として、養育者の“Mind-Mindedness (以下MM)”が子どもの発達に及ぼす影響についての研究が行われている。Meins (1997) は、「幼い乳児の心的状態に目を向け、乳児を心を持った一人の人間として扱う傾向」をMMと定義している。そして、MMを

* 琉球大学教育学研究科

** 琉球大学教育学部

分類する内的状態の下位カテゴリーの設定については、篠原(2007)がBrown & Dunn(1991)や松永・斉藤・荻野(1996)を参考に「感情状態(肯定的感情, 否定的感情, その他)」、「欲求状態」、「思考・認知状態」、「生理的知覚状態」の4つを設けている。MMに関する研究としては、養育者のMMを、愛着安定性の予測因とする研究や、生後6ヶ月の子どもに対する母親のMMの高さと、その後の3, 4歳時点での子どもの欲求・信念理解, 感情理解との関連をみた研究(篠原, 2011)がある。しかし、上述の様にMMの研究においては、子どもの発達との関連に注目したものが主である。そのため、母親がMMを持つことが、安定的な愛着関係に繋がる(Meins, 1997)との言及はあるものの、関わる側が、実際に子どもの心的状態をどの様に認知しているかや、その認知に伴う精神健康といった、「養育者」側に注目した研究は少ない。その様な中、母親のMMと育児効力感の研究において、子どもの気持ちや不快感として捉えやすい特性をもっていると、育児効力感の「子どもと積極的に関わる自信」が低くなることが示されている(金城, 2012)。これより、母親が子どもの様子を見た際、心的状態をどの様に捉えるかによって、育児効力感が変動することが考えられる。しかしこの研究において、子どもの心的状態の捉え方と育児効力感の間で、母親自身がどの様な情動を喚起しているかは検討されていない。

情動とは認知と協調的に結びつき、人間の生物学的社会適応を保証する心的装置(遠藤, 2002)である。また、何らかの情動が生起する時、ほとんどの場合、それに先行して、事象に対する評価という認知活動が介在し、いったん生起した情動は、今度はその後の思考や記憶といった各種の認知にある種のバイアスをもたらすことになる(Lazarus, 1999)ともあり、情動の中には認知が潜み、また認知の中には情動が潜む(遠藤, 2002)とされている。更には、本来子ども自身には何ら関係のないものであっても、その背後における親どうしの頻繁にわたる葛藤およびそこの怒りの表出は、確実に子どもの情動状態に影響を及ぼし、子どもを極端に不安定な状態に置くことが知られている(Davies & Cummings, 1994)。

そのため、子どもの精神健康の為に、養育者が精神的に健康な状態を保つことが大事となることが推察される。養育者の育児場面における精神健康を知るため、また、養育者と子どもの両者にとって良好な関係を築くためには、子どもの心的をどの様に読み取るかだけではなく、養育者自身の情動状態にも焦点を当て、見ていく必要があると考えられる。

母親の育児ストレス状況とその関連要因についての研究を俯瞰すると、育児ストレスには、母親の自身の元々の個人内特性と、現在の母親の意識, 夫に対する思い, 子どもに対する感情といった多くの要因が影響していることが示唆されている(高橋, 2007)。一方で母子の関係性については、子どもの養育に関する母親の意識変化が、母親に対する子どもの愛着の質に顕著な影響を及ぼしたとの知見や(神園, 1999)、母親による子どもの情動認知は、その後の母親の応答行動にも影響を及ぼし、さらに、子どもの発達とも関連することが予測されるという言及がある(小原, 2006)。また、自閉症児の母親における「子ども理解」については、ネガティブな感情面に視点が向く場合は、効力感を得ることができず、子どもとの関わりに難しさを感じるとの指摘がある(金城, 2010)。このことから、母親によるポジティブな子どもの情動認知や意識という母親側の関わりによって、母子の関係性が向上する事が考えられる。

以上を踏まえ本研究では、養育者が、子どもの愛着行動に対してどの様にMMを働かせているかや、子どもの愛着行動に対して、養育者自身がどの様な情動を喚起しているかの調査を行い、それぞれの詳細および2者の関連を検討する。さらに、養育者のMM情動喚起と育児効力感との関連についての検討も行う。

養育者のMMや情動喚起と育児効力感との関連についての解明は、育児効力感の高い養育者を参考に、子どもへの認知や関わり方の視点を提供すること、また、育児相談などの場面において、より養育者の目線や情動に寄り添ったサポートを行うことが可能になると考えられる。さらに、その視点の提供やサポートが、育児困難感を抱く養育者の、ストレス軽減や愛着形成の指針として寄与する点で意義があると考えられる。

方 法

回答を求めた。

調査対象者

A県の2施設において、定型発達児の養育者24名(母親24名、平均年齢35.05歳、 $SD=6.51$)を対象に調査を行った。子どもの月齢は平均38.17、 $SD=18.99$ であった。

調査期間

2014年12月上旬～1月上旬にかけて質問紙調査を行った。

材料

使用した質問紙は、フェイスシート、MM尺度9項目、多面的感情状態尺度12項目、育児自己効力感尺度14項目から構成されていた。

(1) フェイスシート

続柄、養育者の年齢、子どもの生年月日、子どもの性別、療育機関への参加年数の記入を求めた。

(2) MM尺度

Bowlby (1969/1982) による愛着行動の3類型(定位、信号、接近)を参考に、子どもが発達により獲得する行動の分類を行った。さらに、その行動に対し、母親が想像した子どもの心的状態を、複数回答可能な自由記述方式の尺度を独自に作成し、使用した。MMの回答の分類に関しては、松永・斉藤・荻野(1996)や篠原(2007)を参考にした。

(3) 多面的感情状態尺度

寺崎・岸本・古賀(1992)が作成した多面的感情状態尺度から、「抑鬱・不安」、「敵意」、「活動的快」、「親和」の各因子の因子負荷量の上位3つを抜粋したものを使用した。また、12項目それぞれについて「全くあてはまらない」～「はっきり感じる」の4件法で回答を求めた。

(4) 育児自己効力感尺度

田坂(2003)が作成した育児自己効力感尺度を使用した。14項目それぞれについて「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の7件法で

手続き

県内の実施においては、まず、2つの施設へ実際に出向き、調査依頼書を基に調査についての説明を行い、許可を得た。その後、施設に出向き、調査者が養育者1～2名に対し、調査の概要説明後、同意を得られた者に、教示を行った上、個別記入形式で回答してもらった。1人につき所要時間は20分～40分程度であった。

結 果

(1) 愛着行動の頻度

愛着行動の3類型“定位行動”、“信号行動”、“接近行動”の行動頻度に差があるかを検討するため、1要因分散分析を行った。その結果、 $F(1.961,45.105)=5.183$ 、 $p<.05$ で平均値に有意差があり、Bonferroniの方法を用いて、多重比較を行ったところ、定位行動と信号行動の平均値には1%水準で有意差が確認された。

以上の結果から、定位行動と信号行動では、定位行動の方が、有意に頻度が多く、定位行動と接近行動、信号行動と接近行動の間には、行動頻度に差がないことが示された。

(2) 養育者におけるMMの表出量

MMの回答については、それぞれの養育者について、質問9項目におけるMMの言及内容を、篠原(2007)や松永・斉藤・荻野(1996)を参考に、「肯定的感情」、「否定的感情」、「その他の感情」、「欲求状態」、「思考・認知状態」、「生理的知覚状態」の6つにカテゴリー分けを行い、カテゴリーごとの合計言及数を算出した。その結果、「肯定的感情」は平均2.79($SD=2.57$)、「否定的感情」は平均2.42($SD=1.91$)、「その他の感情」は平均0.50($SD=1.14$)、「欲求状態」は平均5.33($SD=2.44$)、「思考・認知状態」は平均2.79($SD=2.36$)、「生理的知覚状態」は平均0.42($SD=0.65$)であった。

次に上記のMMの下位カテゴリー6つの記述量に差があるかを検討するため、1要因分散分析(6水準)を行った。

その結果、 $F(5,115) = 20.48, p < .01$ で平均値に有意差があることが示された。Bonferroniの方法を用いて多重比較を行ったところ、「欲求状態」は、「否定的感情」と「その他の感情」と「生理的知覚状態」との間に、「肯定的感情」は、「その他の感情」と「生理的知覚状態」との間に、「否定的感情」は「生理的知覚状態」との間に、1%水準で有意差が確認された。また、「欲求状態」と「肯定的感情」と「思考・認知状態」、および「否定的感情」と「その他に感情」との間に5%水準で有意差が確認された。

以上の結果から、養育者は子どもが愛着行動を示す際の心的状態を、「その他の感情」や「生理的知覚状態」として捉えるよりも、「肯定的感情」や「否定的感情」、「思考・認知状態」として捉えることが多く、更にこの5つより「欲求状態」として捉えることが多いことが示された。

(3) 養育者におけるMMと情動喚起の関連

MMの下位カテゴリー(6つ)を説明変数、情動喚起は4因子を各々基準変数としステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、「活動的快」と「親和」情動に対する有意な影響要因として、「肯定的感情」($\beta = .46, F(1, 22) = 5.92, p < .05, \beta = .55, F(2, 22) = 9.59, p < .01$)が選択され、「敵意」情動には、「否定的感情」が選択された($\beta = .44, F(1, 22) = 5.40, p < .05$)。

以上のことから、養育者が推測した子どもの感情と養育者自身の情動が一致しており、“同様の情動”を喚起していることが示された。

(4) 養育者におけるMMと育児効力感との関連

子どもが表出する愛着行動を見た際の、養育者の“子どもの心的状態の捉え方”が、養育者の育児効力感にどのような影響を及ぼすかについて検討するため、MMの下位カテゴリー(6つ)を説明変数、育児効力感の3因子を各々基準変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

その結果、「子どもへの積極的関わりの自信」、「子どもを安堵させる自信」、「子どもに自己統制させる自信」のいずれの育児効力感に対しても、有意な影響を示すMMの下位カテゴリーは存在しなかった。

(5) 養育者における情動喚起と育児効力感との関連
子どもが表出する愛着行動を見た際の、養育者自身の“情動喚起”が、育児効力感にどのような影響を及ぼすかについて検討するため、情動喚起の下位尺度(4つ)を説明変数、育児効力感の3因子を各々基準変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

その結果、「子どもへの積極的関わりの自信」に対する有意な影響要因として、“敵意”情動($\beta = -.43$)が選択され($F(1,22) = 4.94, p < .05$)、決定係数は0.19であった。「子どもを安堵させる自信」、「子どもに自己統制させる自信」に対しては有意な影響を示す情動喚起の因子は存在しなかった。

考 察

本研究の目的は養育者が、子どもの愛着行動に対してどの様にMMを働かせているか、また、愛着行動を見た際、養育者自身がどのような情動を喚起しているかという2者の詳細と関連の検討、更には、そのMMと情動喚起が育児効力感に及ぼす影響について検討することであった。

(1) 愛着行動の頻度

愛着行動(定位、信号、接近)の頻度については、定位行動と信号行動の間に有意な差がみられ、信号行動よりも定位行動をより表出することが示された。

今回用いた質問項目のうち、信号行動の項目は、1歳半以降に見られる、他者の意図理解や他者視点の取得に関するものが含まれており、最も認知的発達を要する項目であるため、表出数が少なかったことが考えられる。また、今回質問紙を回答して頂くにあたり、1歳半に満たない児を想定して回答を行っていた養育者も存在していたため、信号行動と定位行動の間に差が生じたことも考えられる。

(2) MMの表出量

MM間の表出量の比較を行った結果、養育者は、子どもが愛着行動を示す際の心的状態を「その他の感情」や「生理的知覚状態」として捉え

ることよりも、「肯定的感情」、「否定的感情」、「思考・認知状態」として捉えることが多く、更にこの5つより、「欲求状態」として捉えることが多いことが示された。

子どもの心的状態を、「欲求状態」として捉えることが多かった要因としては、質問項目の“おもちゃを遠くから見せるもしくは持ってくる”などに対して、「一緒に遊びたい」などの“～したい”という回答が多く、質問項目の行動と「欲求状態」の繋がりを見出しやすかったことや、見出すことが可能な質問項目が多く存在していたことが考えられる。一方、「生理的知覚状態」については、“よく抱っこをせがむ”という項目に対しての、「眠い」という回答に止まり、質問項目と「生理的知覚状態」との繋がりが見出し難かったために、「生理的知覚状態」の読み取りが少ない結果となったことが考えられる。

「その他の感情」の読み取りが少なかったことに関しては、「その他の感情」というのが、「落ち着く」などの中性的感情を表しており、中性的感情＝平素状態であると考えられる。そのため、「その他の感情」の読み取りが、他のMMと比べ少ないということは、子どもの行動に対して何らかの意図を読み取ろうと、心的状態へ積極的な意味付けをしていると考えられる。よって、子どもの平素ではない状態に、迅速に、そして適切に対応するために、子どもの心の動きを敏感に察知し、積極的な意味づけを行っていることが推察される。

(3) MMと情動喚起との関連

子どもの心的状態をどの様に読み取るかと、養育者の情動喚起との関連では、子どもの「肯定的感情」を多く読み取ると、養育者は「活動的快」や「親和」情動を喚起すること、また、子どもの「否定的感情」を多く読み取ると、「敵意」情動を喚起することの2点が示された。

Malatesta & Wilson (1988)によると、喜びの社会的機能は、快感情の伝染を通して、他者との社会的繋がりを促進することであり、悲しみの機能は、他者から擁護や共感、援助を引き出すことである。つまり、喜びも悲しみも、他者との絆を深める機能を持つ情動だと言える(坂上・菅沼、

2001)。本研究における「肯定的感情」とは、喜びや好意を含む快感情であり、養育者による「肯定的感情」の読み取りは、子どもの喜びを目の当たりにすること、もしくは、子どもの喜び感情の伝染により、“気力に満ちた”という「活動的快」の情動や、養育者としての喜び感じることで、“いとおいしい”といった「親和」情動を喚起することが考えられる。また、不安や恐怖といった不快感情である「否定的感情」の読み取りは、養育者自身の情動にも伝染し、その事象に対する「敵意」情動の喚起に繋がることや、また、適度であれば、坂上・菅沼(2001)が述べた様に、養育者の関わりを引き出す機能を果たし、擁護やなだめる行動に至ると考えられるが、否定的読み取りが多くなった場合、子どもの強い要望を感じることから養育者の嫌悪感が強まり、“むっとした”等の「敵意」情動に繋がることが考えられる。以上の様に、養育者が、推測した子どもの感情と同様の情動を喚起しているという結果から、子どもと養育者の情動伝染が想定される。

(4) MM、情動喚起、育児効力感の3者の関連

子どもの心的状態の読み取りと、養育者の情動喚起が育児効力感に及ぼす影響については、子どもの「肯定的感情」を読み取ると、「活動的快」や「親和」情動を喚起するが、その読み取りや情動喚起は、育児効力感へは影響を及ぼさないことが示唆された。また、養育者が「敵意」情動を喚起すると、子どもへの積極的関わりの自信が低下することが示唆された。

前者の「肯定的感情」と「活動的快」や「親和」情動との関連については、(3)の「MMと情動喚起との関連」でも述べた通り、「肯定的感情」と「活動的快」や「親和」についての関連性がみられている。しかし、このポジティブな読み取りや情動喚起が育児効力感の変動には影響を及ぼしていない。その理由としては、上述したように、喜びの社会的機能は他者との社会的繋がりを促進することであり、悲しみの機能は他者から擁護や共感、援助を引き出すことである(Malatesta & Wilson 1988)とされていることから、養育者が悲しみといった否定的感情を読み取った際には、あやす等の“対処”を求められるのに対し、

喜びといった肯定的感情を読み取った際には対処を行う必要がない。そのため子どもの「肯定的な感情」を読み取った場合には、「親としての有能かつ効果的な“ふるまい”に関する期待」とされる育児自己効力感には繋がらず、情動伝染に終止するという結果となったことが考えられる。加えて、育児効力感尺度の項目が、「子どもがぐずった時に、なだめることができますか」など、子どもの“不快・不安場面”に対して対応出来るかという意図の項目が多くなっていることも、「肯定的感情」の読み取りと育児効力感の繋がりを弱くしている1要因であると考えられる。

後者の子どもへの積極的関わりの自信については、(3)において、「否定的感情」の読み取りと「敵意」情動の関連が示唆された。このことから、「否定的感情」の読み取りが「敵意」情動に影響を及ぼし、その「敵意」情動が子どもへの積極的関わりの自信を低下させるという繋がりが想定される。この繋がりを仮定すると、子どもの「否定的感情」を読み取ることで、情動伝染により、養育者も“むっとした”などのネガティブな情動を喚起しているために、子どもへ関わる意欲の低下や積極的な対応の敬遠へと繋がり、「子どもへの積極的関わりの自信」が低下した可能性が考えられる。

総合考察

本研究において、子どもの心的状態の読み取りであるMMと、養育者の情動喚起、育児効力感との間には、一部関連が示唆された。

養育者は、子どもの心的状態の読み取りとして、「肯定的感情」を読み取ると、「活動的快」や「親和」情動を喚起する。また、「否定的感情」の読み取りが多くなると、「敵意」情動を喚起し、更にその「敵意」情動が、「子どもへの積極的関わりの自信」を低下させる、という一連の繋がりが想定された。このように、養育者が、推測した子どもの感情と同様の情動喚起をしているという結果から、子どもと養育者の情動伝染が想定され、愛着行動による関わりが、情緒的な交流の場となっていることが推察される。一方で、否定的な感情の伝染においては、養育者の不快感情

の喚起のみならず、育児効力感の低下にまで繋がる可能性が危惧される。

以上より、子育て場面において養育者による子どもの心的状態の読み取りが、「否定的感情」に偏っている際や、子どもへ積極的に関わる自信が低下している際には、子どもが“ぐずりやすい”などの子育てに難しさをもたらす様な気質を有していることや、養育者の子どもの「否定的感情」への同調が強いために、養育者自身もネガティブな情動を強く喚起している可能性が推察される。そのため、過度に同調することなく、距離を置いた視点を持つことも、養育者の精神健康に繋がると考えられる。

今後の課題と展望

本研究においては、「MM」と「情動喚起」、「情動喚起」と「育児効力感」という観点から、三者の繋がりに関して示唆を行うことが出来た。そのため、今後はサンプル数を増やすことで、三者の構造をより詳細に検討していきたい。

引用・参考文献

- 麻生 武 1995 講座 生涯発達心理学 第2巻 人生への旅立ち—胎児・乳児・幼児期前期 金子書房
 伊藤隆二・橋口英俊・春日 喬 1994 人間の発達と臨床心理学2 乳幼児期の臨床心理学 駿河台出版
 初塚真喜子 2010 アタッチメント(愛着)理論から考える保育所保育のあり方 相愛大学人間発達学研究 1巻1-16.
 数井みゆき・遠藤利彦 2007 アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房
 金城志麻 2012 自閉症児を育てる母親の「子ども理解」と育児効力感の関連 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要 No.4.
 金城志麻 2012 幼児期の子どもを育てる母親の情緒応答性と育児自己効力感との関連琉球大学教育学部紀要第81集.
 金城志麻 2014 母親の子どもの感情認知が育児効力感へ及ぼす影響—母親の“ego-resilience”との関連から—
 松永あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1996 乳幼児における人の内的状態の理解に関する発達的研究—内的状態を表すことばの分析を通して— 山形大学紀要(教育科学)第11巻 第3号.

- 無藤 隆・子安増生 2011 発達心理学 I 東京大学出版会
- 中尾達馬 2012 成人のアタッチメント 愛着スタイルと行動パターン ナカニシヤ出版
- 日本発達心理学会 2013 発達心理学事典 丸善出版株式会社
- 丹羽智美 2005 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究 第13巻第2号 156-169.
- 小原倫子 2010 母子関係における母親の情動認知の発達—生後4ヶ月から12ヶ月までの縦断研究— 愛知江南短期大学紀要, 39 27-37.
- 尾崎康子 2005 幼児期における自閉性症状に及ぼす母子支援の有効性：愛着形成と母子分離のプロセスからの検証 富山大学教育実践総合センター紀要, 6 :127-136.
- 酒井 朗・青木紀久代・菅原ますみ 2007 お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学 第3巻 子どもの発達危機の理解と支援—漂流する子ども 金子書房
- 坂上裕子・菅沼真樹 2001 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究, 49, 156-166.
- 桜井茂男 2006 はじめて学ぶ乳幼児の心理—こころの育ちと発達の支援 An Introduction to Early Childhood Psychology 有斐閣
- 澤田瑞也 1995 人間関係の発達心理学1 人間関係の生涯発達 培風館
- 篠原郁子 2003 <mind-mindedness>とは何か：養育者による子どもの心的状態の読み取りとそれが支える相互作用の在り方 教育方法の探求, 6 :69-75.
- 篠原郁子 2007 母親の mind-mindedness と18ヶ月児の心の理解能力の関連：共同注意行動および内的状態語の発達との検討 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53 :260-272.
- 篠原郁子 2009 母親の「子どもの心に目を向ける傾向」の発達の傾向について—生後5年間に亘る縦断的検討— Human Developmental Research Vol. 23, 73-84.
- 篠原郁子 2011 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達：生後5年間の縦断調査 発達心理学研究 第22巻, 第3号, 240-250.
- 高橋雅延・谷口高士 2002 感情と心理学—発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開— 北大路書房
- 高橋道子・園田陽子 2008 育児への“肯定的感情”にソーシャル・サポートが与える影響：東京・沖縄における調査 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 59 :171-181.
- 田坂一子 2003 育児効力感 (parenting self-efficacy) の尺度の作成 甲南女子大学大学院論集創刊号 人間科学研究編
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 The Japanese Journal of Psychology Vol. 62, No.6, 350-356.
- 山口正寛 2009 愛着機能尺度 (Attachment-Function Scale) 作成の試み パーソナリティ研究 第17巻第2号 157-167.